

## 勿忘草

私が住んでいる町は新しくキレイな家がたくさん建っている。でも、キレイな町の、キレイな私の家の近くには、一つだけキタナイアパートがある。塀に囲まれた二階建ての木造アパートだけど、階段や壁は穴だらけだし、窓だって割れている。近くを通ると変な匂いもして、周りにはネズミの死骸もよく落ちてたりする。町の皆も友達も両親もアパートが嫌いだ。キレイな町が汚れてしまうようで、私も早く無くなればいいと思っている。

そんなアパートの住人のアイツは今日も何も言わない。ポサボサの頭をしていて、いつも同じ服を着ているアイツ。クラスの男子に悪口を言われても、雑巾を投げつけられても、悲しそうな顔は一切せず、涙も見せないアイツ。私はそんなアイツを見ていると無性に腹が立つ。アパートに住んでいることや、服装が汚い事に腹が立つわけじゃない。どんな事をされても、何も言わないことに腹が立つ。本人に抵抗する気がないなら、庇う気も失せる。だから私はアイツが嫌いだった。

学校から帰宅して一時間くらい宿題をした後、息抜きにベランダに出て大きく伸びをする。ベランダからはあのアパートが見えた。不快に思いながら、部屋の中を戻ろうとした時、アイツが大きな袋を持ってアパート裏に行くのが見えた。塀が邪魔で裏まで見えない。何をしているのか気になり、しばらくアパートを見ていたが、アイツは一向に出てこない。私は好奇心に負け、アパート裏まで見に行くことにした。

アパートの横を通り、裏に来てみると、アイツは背を向けてしゃがみながら何かをしている。なにやら集中していて私に気づく気配もない。

「何をしているの？」

アイツは一瞬肩をびくっと反応させ、こちらを振り向いた。「あ……。ど、どうしたの？」

ビクビクしながら質問を質問で返された私は腹がたつた。私はアイツの前に移動して、袋が何なのかを見た。

「花……？ 花を植えてるの？」

袋に紫色の花のイラストが描かれていて、アイツの土で汚れた手には種らしきものが掴まれていた。

「う、うん……」

アイツは戸惑いながらも頷く。

「なんで？」

アイツは少しためらった後、口を開けた。

「……もうすぐアパートなくなるから」

アパートがなくなる？ このアパートが？ 前から無くなればいいと思っていた筈なのに、不思議と嬉しさは感じない。

「なくなるから花を植えるの？」

「花が咲いたら、僕がここからいなくなっても、僕の代わりに花がここにいてくれるから」

正直理解できないかったけど、アイツの初めて見る真剣な顔に何も言えなかった。

「ふーん。でもさ。アパートを取り壊しちゃったら、花なんて咲けないと思うよ」

そう言った瞬間に不味いと思った。

アイツが泣きそうな顔をした。

何をされても泣かないアイツが。

「泣かないでよ。花なんて新しいキレイな家で育てればいいじゃん」

「キレイな家？」

「ほら、アパートがなくなるって事は、そこらへんのキレイな家に住むんでしょ？」

「……僕はこの町からずっと遠いところに行くんだよ」

「なんで？」

「……………」

アイツは何も言わず下を向いた。

「このアパート好きなの？」

アイツは黙ったまま頷く。

「ふーん。じゃあ、手伝うから貸して」

アイツは驚いた顔で私を見た。正直なんでそんなことを言ったのか自分でも分からない。でも、初めて真剣に何かをしようとするアイツを見ると手伝ってやりたいと思った。

「どこまで種を植えるの？」

「このアパートの周り全部……………」

「……………」

「いい、いいよ手伝わなくて」

「……………」

私は袋から種を取って、植え始めた。

最初はアイツもぶつぶつ何かを言ってきたが、私が無視したら諦めて一緒に植えた。

「水はどうするの？」

私がそう聞くと、考えていなかったらしいアイツの顔が青ざめていく。

「はあ……。アンタがいなくなっても私が咲くまでは水あげ

といてあげる」

「ほ、本当に……………」

「約束する」

「……………」

初めてアイツが笑った。

少しだけ、アイツが遠くに行くのが惜しくなった気がした。

日が暮れる直前に、種をすべて植えることができた。

「ふう。疲れた」

「ありがとう。でも、どうして手伝ってくれたの？」

「なんとなく」

「そっか……………」

少し沈黙の間が続いた後、アイツは話し出した。

「この花ね。意味があるんだ」

「意味？何それ？」

「……………」

「……………」

「……………」

「忘れないけど」

「え？」

「このボロアパートがあったことも、アンタがここに住んだことも忘れないけど」

「なんで……………」

「なんでって、嫌でも忘れられないの」

「……………」

また笑った。なんだか照れ臭くなった私は背を向けた。

「嫌味なのに……………」

「じゃあ、アンタさ。この花が咲いたら、いつか見に戻ってきてよ」

「え……」

「それまで花は見ておくからさ」

「……うん。約束する」

花を植えるのを手伝って何日かした後、アイツは突然転校した。別れの言葉は言えなかったけど、約束を守るためにその後はアパートの周りに毎日水をあげた。けれど、あげ始めて数週間でアパートの取り壊し工事が始まり、アパートの近くには入れなくなった。それでも最初は夜な夜な出かけては水をあげていたが、見つかって叱られてからは行くことが出来なかった。

そしてアパートが全くなり、平地となってからはまた水やりを始めた。

そこに、もう種がないと分かっている私でも私は水をあげ続けた。しかし、それも数日で断られた。新しいマンションの建設が始まろうとしていたからだ。平地には柵がされて中に入れなくなっていた。

その翌日ベランダから平地を見てみると、柵がなくなっていて代わりに綺麗な四角い紫の花畑があった。

「咲いた……」

まさか咲くなんて。まずはこの光景をアイツに見せてやりたいたと思ったら、急に悲しくなって涙が出た。その後は、町の偉い人が花畑の真ん中に町のモニュメントみたいなのを置いて簡単な公園にしたから、マンションの計画はなくなったらしい。

それからはベランダから公園の花を見る時間が増えた。花

が綺麗だからなんだけど、実際は期待しているのかもしれない。アイツが見に来ることを。